



さっぽろ自由学校「遊」 飛ぶ教室 (スタディツアー)

ポーランド

—アウシュヴィッツから平和を考える

ツアー報告書

2019.11.25 ~ 12.1



ポーランドスタディツアーを企画して

岡田 朋子

私は1996年から2000年までの4年間、ポーランドにJICA青年海外協力隊として滞在していた。その頃のポーランドは社会主義から資本主義へ移る過渡期で、人々の中には社会主義時代の名残りとしてこれから訪れる資本主義への期待が入り混じった感情の中で日々生活を送っていた。その頃はまだEUに入っておらず、いわゆる西側の人（ここでは社会主義以外の国の人）と接する機会があまりなかったポーランド人は遠くよくわからないアジアの国から来た日本人にもとても優しく接してくれた。その優しさはどこからくるのか、国民のほぼ8割がカトリック教徒であるという信仰からくるものであることは大きな理由かとも思うが、やはりポーランドの歴史的背景からくるものも大きいのかと感じる。

ポーランドは歴史上、常に大国に囲まれ3度国をなくしている。その度に自分の国を再建するのだという固い意志のもと、国を復興してきた。特に第2次世界大戦ではナチスドイツに領土のほとんどを占領され、多くのポーランド人が収容所などで亡くなってきた。今回の目的のひとつであるアウシュビッツでもユダヤ人同様に祖国を解放しようとしたポーランド人の政治犯が多数亡くなっている。ポーランドにはアウシュビッツのような強制収容所がいくつかあり、いわゆるダークツーリズムとしてポーランドを訪れる人が多かった。ポーランド人にとっては戦争中のことは思い出したくない辛い経験であったが、それを乗り越え、多くの人にポーランドであったことを知ってもらうことの意義を認め、経済的な成長も成し遂げ、自国の豊かな文化や自然を外国人に紹介できるようになったことを誇りに思っているに違いない。その大いなる誇りをもってポーランド人は外国人に対して優しくなれるのだと私は思う。そんな誇り高

く美しいポーランドをぜひ多くの人に紹介したく、日本とポーランドの国交100周年を機に企画させてもらった。

今回は「アウシュビッツから平和を考える」というテーマで始まった旅であったが、アウシュビッツでは加害者であった国も被害者であった民族の若者たちも見学に訪れていた。過去から何を学んで、何を伝えていかなければいけないのかは私たち大人がまず未来の子どもたちに学ぶべき機会を与えていかなければならないのだと強く感じた。

最後に飛行機の欠航、悪天候などのハプニングで身体的につらかった時でも明るくついてきてくださった皆様に心から感謝したい。みなさん、本当にありがとうございました！



■アウシュビッツ

問われるもの

アウシュビッツに行く

アウシュビッツに行く一仕事のリタイアした昨年に実現した。

入口の門に掲げられた「ARBEIT MACHT FREI」（働けば自由になれる）の下を通る時の緊張感は相当なものだった。門の外と内は別の世界のような。

ガイドの中谷剛さんに案内されて多くの遺品や資料をみる。夥しい数の髪の毛、眼鏡、かばん、靴、歯ブラシ、松葉杖や義足など……。中谷さんのいろいろな説明に、こちらの理解が追いつかなくなることもある。周りはすごく多くの人が熱心に見ている。泣きながら、目を真っ赤にしながらいる。

収容された人たちは左腕に〈番号〉を刺青され、自分の〈名前〉を奪い取られる。〈名前〉のない自分にされてしまうのだ。収容されなかった人たちはガス殺なのだ。出口でも泣きながら支えてもらっている人が何人もいる。

翌日も中谷さんの案内でビルケナウだ。中央監視塔に上ると広い収容所が見渡せた。「あなたたちの見えるものは、ナチスの見えていたものと同じなのですよ」と言われてハッとする。広く見えるのだなあ、などという気持ちは吹き飛んでしまう。中谷さんによると、アウシュビッツ・ビルケナウに来る人の中で真剣に聞き入るのはイスラエルからの人で、次がドイツ人だという。私たちのすぐ近くにドイツ人のグループがいたが、静かで真剣な表情であった。ところが、と中谷さんはいふ。日本人の中には、食事の際のアルコール臭そのままやって来る人がいるのだ。「日本人のあなたが、私たちの歴史も知らないのに、なぜガイドをしているのか」と、イ

原 幸男

スラエル人の女性に泣きながら言われたという。

ビルケナウを象徴するものとして、降車場に一台の貨車がおかれている。かつて、ここへはヨーロッパ各地から貨車を運んでユダヤ人やロマたちを劣悪な環境で運んできたのだ。到着した人たちの大部分はガス殺だった。この貨車の向こうに、レンガ造りだった収容棟の基礎部分が煙突とともにいくつも残っている。その一つ一つが墓標に思えた。

次に、ガス室・焼却炉の残骸だ。犠牲者たちは、シャワー室に見せかけたガス室に入れられ、〈死〉に突然に襲いかかられたのだ。抗する術もなく絶命させられ、焼却炉へ投げ込まれたのだ。

アウシュビッツ・ビルケナウでは110万人が殺された。110万というマスの数からは見えてこない、人間の狂気が支配した時間と空間での一人一人の〈生〉の無念さを感じる。

昨年のアウシュビッツは終わったが、もう一度行きたいという思いが大きくなった。

再訪

二度目のアウシュビッツとなった。今度も中谷さんの案内だ。個々の遺品・資料を見ること以上に胸に迫ったのは、中谷さんの三つの言葉だ。「暗黙の支持」「教育」「実際に見る」。



八十数年前、ヒトラーは一朝一夕に権力を握ったのではなく、他党の力を借りてであった。権力掌握後に反対党を潰し反対者を圧迫していった。ドイツ国民は支持はしなくとも黙って見ているだけだった。しかし、それは〈支持〉と同じであった。〈暗黙〉の〈支持〉であったのだ。この〈暗黙〉は〈傍観〉とも〈共犯〉とも言い換えが可能だろう。

現在、アウシュヴィッツはヨーロッパ共通の教育課題である。ここを訪れる子どもも教員も多い。人間を人間としてみる教育がなされ、歴史の事実をしっかりと学ぶことは、偏狭な自国ファーストや排外主義に陥らず、物事を豊かに考えられることになる。



翻って、日本の教育の現状はとつい考えてしまう。加害記述のない教科書、多大な困難さを伴う平和教育。2006年のアベ政権による教育基本法の改悪後、「国家のための教育」は〈教育勅語〉の容認、「特別の教科 道徳」の新設などにみられるように加速の度を増しているのだ。

今回アウシュヴィッツで案内してもらったのは、私たちのほかに若者や女性を中心に個人やごく少人数のグループで来ている人たちだった。フェイクニュースが横行している今だからこそ、可能なら、その場に実際に行って真偽を確かめることの大切さを中谷さんは語っていた。その意味からも、個人や少人数で来ている人たちに感服せざるを得ないのである。ウィーン経由で来ていた女性は、常に中谷さんの近く

にいて説明を真剣に聞いていた。その姿を見て、ホッと明るい気持ちになった。

「暗黙の支持」「教育」は、現在の日本においてこそ真剣に考えなければならないのだ。

問われるもの

アウシュヴィッツ（ビルケナウも含めて）は、「人間の尊厳」と、真逆の「人間の狂気」との両方を私たちに突きつけてくる。「人間とは何か」「狂気の本質は何か」、生半可な思考を跳ね返してしまう根源的な問いを発しているのだ。それと同時に、私たち日本人にアジア・太平洋戦争の戦争責任・戦後責任を取ったのかと厳しく問ってくるのだ。

遺品や資料を泣きながら見る人、支えられる人・・・関係者に犠牲になった人がいるのだろうと想像できるのであれば、韓国で元徴用工の人たちが声を挙げていることにも理解が及ばなければならないだろう。ところが、とんでもない韓国バッシングだ。マスコミの異常さには表現する言葉が見当たらない。

過去を直視しない（できない）まま、日本社会では無知・無関心が溢れ〈記憶〉が〈忘却〉されようとしている。過去を直視してしっかり向き合うこと。小さな歩みであっても、向き合い続けることを強く求めているのだ。

2019年。ナチス・ドイツがポーランドを侵略して第二次世界大戦を引き起こして80年目。



アウシュヴィッツ・ビルケナウ ナチス・ドイツの強制絶滅収容所を訪ねて

江川 靖子

アウシュヴィッツに「行きたい」そして「行ける」というだけで十分な事前準備なく望んだことを今は大反省。ドイツ・ユダヤ人・ポーランド・クラクフと再度知識の穴埋めをしているが、あまりに全てが衝撃的でまだ自分の中で消化不足というのが正直な気持ち。私なりに見て感じたことを報告します。

私たちが滞在しているクラクフからは車で1時間半程。この収容所はドイツ領にされたポーランドのオシフィエンチム市郊外に1940年ドイツによって造られたため独語表記のアウシュヴィッツという名に変更されそれが強制収容所の名と周知された。また欧州の中心に位置し鉄道の接続（70本の引き込み線。ビルケナウに立つと実感）がよく、工業に欠かせない炭鉱の産地に隣接し広い土地の確保が容易など、膨大な数の労働力を集め、戦争遂行に欠かせない物資の生産に適していた。労働力の確保、政治犯・思想犯を収容する役割を持つ一方で、労働には適さない更には劣性を処分する絶滅収容所としての機能も持つようになっていった。収容所周辺の住民は強制退去させられSS（ナチス親衛隊）の宿舍や関連施設が建てられていった。権力のあるものが占領により土地を奪い人権を奪い地名を変えるとするのは現代にいたるアイヌ民族の問題でもあり沖縄の問題でもある。決して過去の出来事ではない。

9時に日本人ガイドの中谷さんと合流。身体と持ち物のセキュリティチェックをし、各自解説用のイヤホンをつける。アウシュヴィッツへの入り口は博物館への入り口でもある。“ARBEIT MARCHT FREI”「働けば自由になる」と書か

れた門をくぐる。複雑な心境。目の前に広がるレンガ造りの収容棟、ポプラ並木、有刺鉄線の囲い…写真撮影する参加者に中谷さんは「あなたの写真をどのように伝えようと思うのか。それは加害者にも被害者にもなる…」と。とても重たい言葉だ。ここは歴史を記憶し史実を伝えると同時にホロコースト「ユダヤ民族大虐殺」の場であり墓なき墓地 - 追悼の場でもある。施設内での撮影は可能だが、一部地下施設や髪の毛など人体の一部が展示されている場所では死者への敬意から撮影は禁止されていた。ともあれ私は中谷さんの話に集中！しかし、頭に留め置くことは難しい。言葉にはできない何かが、もやもやと現在に至るまで続いている。シェアする時間があつたらよかつたのかな。

中谷さんの案内で展示棟を見学。眼鏡、食器類、衣服、靴、住所が書かれた旅行鞆、どれもが当時身に付け持っていたものばかり。布地の原料とされた女性の髪…その量のすごさに圧倒される。粗末なベッド、地下ガス室の様子がわかるジオラマ（爆破された建物がビルケナウに残存）や殺人ガスに使われたチクロンBの大量の空き缶、地下にある餓死牢や立牢などの監房…今、こうして思い出して書いていても生々しく身体が震える。外にでると大勢のポーランド人抵抗活動家たちが銃殺刑にされた“死の壁”があつた。その壁を見た瞬間こらえていた涙が止まらなかった。壁の前にはポーランドのナショナルカラーである白と赤の花が飾られていた。それからガス室・焼却炉に向かった。天井にはチクロンBを投げ入れる穴、その横室には遺体を処理する焼却炉…人はなぜこんなにも残酷になれるのだろうか。戦時下では人が人でなくな

る。南京大虐殺、731部隊、三光作戦などなどかつてアジア諸国で行った旧日本軍の非人道的残虐行為が重なる。人間は実に恐ろしい存在だ。人間だからこそ希望があるのか…。

30分程の休憩の後、私たちは第2収容所（ビルケナウ）へと向かった。「死の門」と呼ばれたゲートをくぐって中に入る。鉄道の引き込み線が真っ直ぐに敷地内に入り込んでいる。1台の貨車が見える。ここで罪なき多くの犠牲者は降ろされ荷物を没収され、SSの医師による選別を受け大半がガス室に送られた。何故ユダヤ民族だけが虐殺されたのか。私は『アウシュヴィッツ-ビルケナウ あなたの立っているところ…』という1冊の本（写真集）を買った。それは生還者によって見つけ出された75年前の写真と今私たちが立つまさにこの同じ場所・場面を時空を超えてぞっとするほど伝えている。その先に何が待っているかも知れない彼女たち

アウシュヴィッツ訪問 報告

ツアー4日目はクラクフのスタレミヤストホテルをAM7:30に車でクラクフの西60kmのアウシュヴィッツ博物館を目指し出発しました。市内はスモックで視界は悪いですが郊外に出ると視界が開けます。ポーランドの交通規則では昼夜の別なくヘッドライト常時点灯、制限速度郊外90kmと日本とずいぶん違います。因みに国名の由来ポーランド「平原・農牧地」の通りアウシュヴィッツまではなだらかな景色が広がっていました。1時間半程でアウシュヴィッツ博物館に到着し、日本人にはあまりなじみがない博物館でのセキュリティチェックを受け、日本人ガイドの中谷さんと合流しました。見学場所は現在博物館になっているアウシュヴィッツ収容所と2km程離れたビルケナウ収容所です。最初

まなざしにどう向き合えばよいのかまだ言葉が見つからない。

全てはヘイトスピーチから始まったという。安倍首相は、あの戦争に何ら関わりのない子や孫そして先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を負わせてはならないと語った。中谷さんは「過去のことを忘れては未来は築けない」と言う。世の中の“変”に声を上げ続けるかそれとも傍観者になるか、自分自身に問う。アウシュヴィッツに実際に立ち感じてきたこと、これからに活かしていきたい。



渡部 一雄

に当時の国際状況などの説明を聞き展示室に入ると収容者の刈られた大量の髪の毛・眼鏡・靴などテレビ等で何度か見たことがあります。現物を目にすると言葉もありません。事前にガイド中谷剛著「アウシュヴィッツ博物館案内」を読みました。展示棟1号～14号までの展示物は文章、写真では感じられないものがあるとつくづく思いました。中谷さんの真剣な眼差し、豊富な知識を基にした説明は見学の質を確実に向上させます。見学者はほとんどの方が国別にガイドをつけているのですぐわかります。どのグループも言葉少なく真摯な気持ちで見学していることが一目でわかります。印象深かったのはユダヤ人のグループとドイツ人のグループがすれ違うことがありましたがお互いどんな気持ちなの

か、ふと思いました。その後ビルケナウ収容所にバスで移動し、映画「シンドラーのリスト」のロケで使われたゲート「死の門」に着きました。こちらは規模はアウシュビッツより大きいのですが敗戦が確実になるとドイツ軍が証拠隠滅のため破壊したため建物はあまり残っていませんがガス室の瓦礫は野ざらしのまま少しづつ朽ち果てているのがとても生々しく感じました。

アウシュヴィッツ強制収容所報告

ナチス及びドイツ同盟国日本の敗戦・戦後・現在と近未来

ナチスの思想は反ユダヤ・反民主主義・反共産主義とドイツ民族優越であった。アウシュヴィッツ強制収容所は、初めポーランドを占領したドイツに抵抗したポーランド人を収容した。彼らが最初の犠牲者であった。1940～45年の間にナチスドイツは100万人を超えるユダヤ人と数万人のポーランド人とソ連軍捕虜を虐殺した。

収容所のアーチに掲げられた、『働けば自由になる ARBEIT MACHT FREI』とは収容所から解放させるのではなく、ユダヤ人にユダヤ人抹殺作業を行わせることだった。それしか生き伸びる手段を与えなかった。このために、戦後しばらくはユダヤ人の間で取り上げにくかった。

ユダヤ人が集められ、ドイツ人医師が働ける者を選別し、その他はユダヤ人を害虫扱いして殺虫剤用毒ガスチクロンBで直ちに殺した。また医師は人体実験も行った。

ナチスがユダヤ人絶滅のため強制収容所を作った理由

第一次大戦でドイツは敗戦の結果、到底払えない国家予算にして20年分の賠償を要求された。

ユダヤ人が金儲けしたのでドイツが貧しく

中谷さんの説明でヒトラーを生んだ背景に民主主義の手続きに則り無関心層を巧みに取り込みナチスの肥大化を生んだとの説明がとても印象的でした。今の日本は政治に無関心な人が多く感じられます。歴史の過去に学び国が間違った方向に進まないようにまずは身近な人から働きかけたいと思います。

森脇 栄一

なったと、国家を持てなかつた弱い立場にあったユダヤ人を叩く風潮が起きた。当初ドイツで、ナチス支持は多くなかったが野党は連立を組む為にナチスを支持した方が有利だったからなびいてしまった。民衆の大部分はこれを傍観しているだけだった。

議会は全権委任法が成立し国会は機能しなくなった。そして敗戦で押し付けられたワイマール憲法を改憲した。

ニュルンベルクでの戦争裁判の被告は「自分は命令に従っただけだ」と自分の犯罪を認めずに、公開処刑された。

西ドイツ企業は戦争中もユダヤ人に給料を支払っていたと弁解していたが、ユダヤ人がアメリカの裁判所に告訴しドイツに対して保証請求を認められたため、アメリカで仕事が出来なくなるので和解に応じた。東ドイツは共産圏にあって言論の自由はなく、資本主義だから虐殺が起きたとしていたが東ドイツが終焉を迎えるころ自らの責任を認めた。

ドイツという他人事では済まない現在の日本の状況を恐れる

自国の恥を認めず朝鮮・中国人ヘイトスピーチ・出版・ネット情報が溢れている。

麻生元総理はナチスにならって改憲と発言している。

■ヤギエオ大学日本語学科 見学／交流会

森脇 栄一・細谷 洋子

クラクフ滞在1日目は、旧市街観光とヤギエオ大学日本語学科の学生たちとの交流会だった。参加者は3年生で、秋から新学年が始まるポーランドでは、日本語を学んでまだ2年と2ヶ月程度だということだったが、それにしては皆かなり日本語が上手だった。

日本語を学ぶ動機は、

- ・日本語は特に漢字が難しい、しかし読めるとおもしろい、美しい。
- ・子どもの時日本のアニメ・ポケモンが好きだった。
- ・日本の音楽に興味を持った。
- ・日本文化、日本文学に特別なものを感じた。
- ・中学時代から日本文化に興味があった、翻訳家になりたい。
- ・叔父が柔道をやっている。
- ・1年は数学科だったが2年で日本語学科に変えた。

ということだったが、アニメはほとんどの学生があげていた。日本アニメの人気と底力を実感させられた。また、クラクフには日本人が多く、日本人の友人がいるという理由を挙げた学生もいた。クラクフには日本人が多いというのは、まったく知らなかった。日本企業が多いとも思えないが、どんな人たちなのか、聞いてみたかった。

学生の自己紹介と日本語学習の動機を聞いた後は、私たち日本人の側が自己紹介をしたが、アウシュヴィッツとアンジェイ・ワイダと連帯のフレサ委員長くらいしか知らない。他は、ポーランド人作家の本を読んだ、ホストファミリーで外国人を受け入れてきた経験がある、現在台



湾に住んでいることなどが話された。

双方の自己紹介の後、少人数に分かれて教師が用意してくれていたフィールドプログラムがあった。人数がほぼ同じだったので、くじ引きでペアを組み、

- ・おいしいポンチキ(バラのジャム入り揚げパン)を食べる。
- ・ゴシック様式の大学初期の建物コレギウム・マイウスをみる。
- ・ポーランドのかわいい食器屋でお買い物。
- ・虫が閉じ込められた琥珀を見よう。

などのプログラムから行き先を選び、街へ出た。2〜3組が一緒に行動したグループもあり、コレギウム・マイウスが閉館して見られないなどの予定外のことには、学生たちで相談して別のプランを出してくれるなど、意思の疎通にはまったく困らなかった。歩きながらのおしゃべりも弾んで、楽しい時間だった。

日本語学科の教師は、中年の女性だったが、交流会の進め方といい、学生たちへの対し方といい、とても優秀な教師だと感じた。2年そこでこれだけ日本語が話せるように教えるというのは、すごい！の一言に尽きる。日本の大学でも、外国語を学ぶ学生たちとその言語を母語とする旅行者との交流の機会を持つなどの工夫があってもいいのではと思う。

■シンドラー博物館

原 幸男

アウシュヴィッツの翌日、シンドラー博物館に行った。「シンドラーのリスト」で知られるオスカー・シンドラーの工場が歴史博物館となっている。1939年から1945年まで、クラクフはポーランド中央部を統治する、ナチスのクラクフ総督府がおかれた都市である。知識人と政治指導者は殺され、ヤギエオ大学では教授200人が犠牲となった。

館内には、絞首された人たちのすぐ下で笑顔で写っているドイツ兵の写真があって残酷さを物語っている。

この街には6万人のユダヤ人が住み、全体の4分の1であった。ゲッターがつくれ、やがて収容所へ送られていった。ナチス・ドイツの冷酷な国家政策が実行されていったのだ。

館内には、これらが解説されていた。ドイツ人の若者たちのグループと一緒にだったが、説明を聞いている彼らの表情は真剣であった。



■日本美術技術センターを訪れて

返町 賢治

旅行5日目 11月29日(金)

旅程後半に入り、その上、前日のアウシュヴィッツ・ビルケナウという、今回旅行のメインを見学し、その重く深い衝撃をずっしりと受けたためか、心身とても疲れた私でした。その上この日も、午前中のユダヤ人街、シナゴーク、オスカーシンドラー博物館と訪れて、その疲労感もかさなって重くのしかかっていたように感じていた。

さて、「日本美術技術センター MANGGHA」(現日本美術技術博物館マンガ)は、ウイスワ川に沿ってヴァヴェル城(3日目見学)に向い合っ位置し、建築家磯崎新氏の設計のもと、「波」をモチーフに、1994年にオープンした。この博物館は、1944年アンジェイワイダがクラクフの



「織物会館」で、フェリックス・「マンガ」・ヤシエンスキーの日本の美術コレクションを見て、「日本」と出会い、その時の感動をより大勢の人にと、1987年「京都賞」を受賞した時の賞金を全額出資し、日本・ポーランドの多くの人々の協賛を得て、ポーランドにおいて唯一日本文化を紹介している機関となっている。

当日は、「日本刀展」「ワイダの日本スケッチ展」を開催していた。クラクフまで来て日本刀に回りあえるとは思ってなかった。暗い照明の中に浮かび上がる日本刀とはちゃんと向き合うことができなかった。むしろワイダの在日時に描いた軽やかな線描にホッと感じる部分があった。そして日本料理も提供するという「マンガカフェ」には、クリスティーナ・ザファトヴィッチ・ワイダ（ワイダ夫人）が関係者と打ち合わせ中なのを遠望する



ことができ大感激だった。

ポーランドに20年以上住んでいるという学芸員の宮永さんに博物館と併設の「日本庭園」「茶室」を案内していただいた。日暮れの早いこの地、その上雨が降ってきた中を、ウイスワ川に架かる橋を歩いて旧市街へと向かった。

■ ヴィエリチカ岩塩抗を訪れて

権瓶 美紀子

4年前息子がヴィエリチカ岩塩抗訪問の時の写真十数枚を見せ「これ、全部塩でできているんだよ」「へー嘘みたい。ほんとに塩で？」こんなやり取りを思い出しました。まさか自分が体験できるとは夢のようでした。

ヴィエリチカ岩塩鉱は1978年ユネスコ世界遺産に登録。1250年頃から1950年まで稼働していた岩塩採掘場です。見学ルートは全体の1%程で約3.5km、深さ約135mになっています。塩の洞窟とも呼ばれていますが名の通り全部塩でできているからです。

クラクフから15km離れているため片道40分かけてバスで移動。ツアーのみでの見学で日本語ガイドがなく英語ガイドツアーの見学です。英語がわからない私は見学することに没頭することにしました。

エントランスから階段で地下へ移動するのですが狭い階段をグルグルと下り、たどり着いた洞窟がまさに岩塩。指でなぞって舐めてみると「しょっぱい！」まさに塩でした。岩塩のトンネルを案内のまま進むと各所に王や妖精など様々な像や発掘の様子、地底湖などを数か所にわたって見学できます。さらに進むと深さ100mには



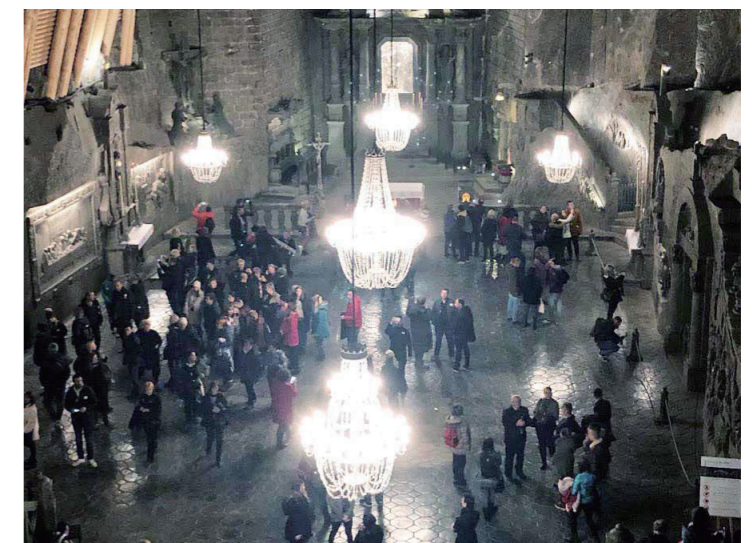
採掘後の空洞を利用して作られた礼拝堂があります。採掘作業の安全を願って作られ、驚くことに作ったのは芸術家ではなく抗夫だそうです。祭壇、天井、床、階段、シャンデリア、レリーフ等全部が塩でできているのです。ここで「最後の晩餐」を見ることができるのは…とにかくこの空間は圧巻でした。礼拝堂では今でも日曜日にミサが行われているそうです。またこの空気は塩分を含んでいるため殺菌作用があり

健康に良いそうで地下保養所もあるそうです。『机上の学習より一見の価値』を身を持って体験することができました。



そして地上へ。1グループのエレベーターが出発すると「カー」の音が。恐る恐る簡易な個室へ入り、私たちのグループも「せーの、カー」と叫ぶことに。一致団結の瞬間でした。十数秒で地上へ到着。併せて忘れられない思い出になりました。

最後にさっぽろ自由学校「遊」の事務局の皆様、コーディネーターの岡田さん、サポートの悠生さん、沢田さんお疲れ様でした。そして初対面にも関わらず暖かく迎え入れてくださいました参加者の皆様に感謝いたします。楽しく有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。



ダークツーリズム

—悲しみの記憶を繰り返さないために

細谷 悠生

「ダークツーリズム／ブラックツーリズム」とは、戦争や災害のあった場所を訪れ歴史や当時のことを知り学ぶ観光・旅行のことを指す。今回訪れた「アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所」はその最たるものとして知られるが、学生時代の薄っぺらい歴史の授業でさえ、アウシュヴィッツは人類最悪の記憶という印象が強く、けして気軽に訪れられる場所ではないと思っていた。

恥ずかしいことに私は、アウシュヴィッツがポーランドにあるということさえ知らなかった。しかしポーランドに行くこと、アウシュヴィッツを見に行くことを話した友人たちも同じ。ナチスドイツによる悪の所業の象徴、だからドイツにあるはずと思い込んでいたのだ。さらにその反応はふたつに分かれた。見ておいたほうがいいよね、という人もいれば、なぜ15時間もかけてそんなところに行くのか、本や映画じゃダメなの？という人もいた。ポーランドに行くのにアウシュヴィッツを外す人は多くないだろう。でも、多くの人にとって旅行とは基本的に楽しみのために行くものだ。それなのに、なぜつらい場所へわざわざ出向くのか。

今回の旅はスタディ・ツアーであり、「学び」が主たる目的だった。私にとって最も意義を感じていたのはもちろんアウシュヴィッツだが、同時に恐れもあった。映画や本で見聞きしてきた、その都度押し潰されるような気持ちを覚えた、その場所を実際に訪れること。映画や本を超える悲しみが襲ってくるのではないかとそこには見て楽しくなるようなものは一切ない。広島原爆ドームや沖縄のひめゆりの塔へ行った時も同じように大きな悲しみを感じ、「戦争体験者がこの世からいなくなる時代は必ず

やってくる、私たちが忘れずにいなければ」と確かに思ったのを覚えている。

アウシュヴィッツ公認日本語ガイドの中谷さんは、犠牲者の遺品の前を通る時「この靴の数、かばんの数に目を取られず、その靴を履いていた人のことを思い浮かべてみてください」と言った。その先の廊下には犠牲となった人々の写真が延々と貼られていて、これがあの靴を履いていた人、あの髪を持ち主、と見つめて歩いた。1人ひとり、ワルシャワやクラクフの街で見かけた人たちと同じような顔をしていて、同じようにそれぞれの暮らしがあったはず・・・と恐怖と悲しみが生々しく襲ってきて、これがまさにわざわざ遠路はるばるやってきた理由だとわかった。

中谷さん自身、当初はなぜ戦争の記憶を伝えるのか、そこにどんな意味があるのかわからなかったという。ホロコーストの生還者が自ら行うガイドを聞いていくうちに、史実の正確性という意味では体験者には敵わない。だが、そこから歴史を理解するとか、二度と繰り返さないためにどうするか議論を発展させることは、実際に経験していない世代だからこそできる、とインタビューで話している。

ダークツーリズムは1990年代末頃から海外で研究が始まったが、近年日本でも評論家の東浩紀や津田大介らがチェルノブイリ取材した後、福島原発や周辺区域を「観光地化」させて広く見せるべきだと提唱し始めた。日本ではそうした場所を「負の遺産」と呼んできたが、「ツーリズム」という言葉を入れることで旅行会社もプランを提案しやすくなったり、概念として受け入れられやすくなったりしているという。一方で、まだ故郷へ戻れず避難生活を強いられ

ている人や、大切な人を失った悲しみの中にいる人が多い状況で、そうした場所を「観光地化」させることに異論を唱える声もある。アウシュヴィッツでも、中谷さんが「遺族に配慮して、撮影はご遠慮ください」とか「記念写真のような撮影は避けてください」と注意を促すことがあった。訪れやすくなる代わりに、しかし犠牲者への敬意は必須というのが、ダークツーリズム・スポットを訪れる条件だ。

重苦しい気持ち、二度と繰り返さないためにどうすべきかという思い。もしそれらを感じることができたなら、それはダークツーリズムとして成功なのではないか。アウシュヴィッツでもイスラエルやドイツの高校生の団体を目にして、中谷さんが「彼らは教室に持ち帰って議論するんです」と話していた。経験者の記憶をもとに、後に続く人々が自国も荷担した戦争犯罪について自覚し、繰り返さないために何をすべきかを問う。私たちに課された責任を認識するために、娯楽だけでない、ダークツーリズムの価値を感じ取ることができた旅だった。

今年2月に韓国のソウルを訪れた時、こんなことがあった。通りかかったインフォメーションで観光地のパンフレットを手にとると、スタッフの男性が慌ててやってきて「そこはあまり楽しい場所ではありません」と言った。そのパンフレットは「刑務所博物館」のもので、男性は「明日は、あの日ですから」としつこく止めた。後でネットで調べると翌3月1日は日本統治からの独立記念日で、大きなデモが行われるため日本人旅行者は気をつけるように、とのこと。本来なら日本人が訪れるべき場所なのに、私たちの身の安全を考慮してくれた男性の対応に、時期を見て必ず再訪したいと思った。

私が住む台湾にも、日本統治時代の原住民虐殺事件「霧社事件」や国民党政府による政治弾圧「白色テロ」の遺跡が残されている。白色テロ時代の収容所跡地を再利用した「国家人権博物館」を先日仕事で訪れたのだが、その際のガ

イドは中谷さんと比較すると「その時代にあったことを教えてくれる人」でしかなかった。中谷さんはそれだけでなく、それよりもむしろ私たちがアウシュヴィッツを見たその後のこと、これからの道筋をゆるやかに示すようなガイドをした。さまざまな残酷な事実、それだけで足がすくむような思いをした後に、その先はご自身でどうぞ、と放り出されるような感覚に不安といささかの反発を覚えたが、後になってガイドとしてこれほど優秀な人に出会ったのは初めてだと思った。これから先、どういう社会を築いていくか、そこにアウシュヴィッツを見たこと、知ったことをどう活かしていくかは私たち自身が取り組むべきことなのだ。

この原稿を書くに当たってもう少し勉強しようと、中谷さんの著書や関連書籍を数冊読んだ。その中で印象的だった言葉を最後に紹介したい。「被害者にとって、忘れられることは二度死ぬことと同じ」。アウシュヴィッツを訪れたことを一生忘れない体験としてもっていきたい。

余談だが、現在Netflixで「世界の“現実”旅行」という、ダークツーリズムをテーマにしたシリーズが配信されている。この第2回で日本を訪れており、富士の樹海や軍艦島とともに福島の避難指示が解除された地域が登場する。そこで参加者がそれぞれ持参したガイガー・カウンターを取り出すと、チェルノブイリの立ち入り禁止区域の50倍を超える数値が示され、全員一致でツアー中止を決める、という場面があった。この地域の観光地化、ダークツーリズム・スポット化にはまだ大きすぎる課題が残されているが、いつか世界で共有すべき財産として日本が形にしていけるように願う。



ポーランドの旅

■ポーランドスタディツアーレポート

沢田 祐季

1. 思いがけないハプニング

今回のツアーでの一番のアクシデントは、行きの飛行機の乗り換えを予定していたヘルシンキ空港でストライキが起きたことです。

予定では、新千歳→名古屋（中部）→ヘルシンキ→ワルシャワといった感じに乗り換えをし、当日の夕方6時半頃にワルシャワに到着して一泊。夜はショッピングモールでの夕食と市街の散策をする予定でした。しかし当日、新千歳空港で集合した後にヘルシンキ空港でのストライキを知りました。話し合った結果、到着までにストライキが終わることに賭けてヘルシンキまで予定通りに向かうことにしましたが、結局ストライキは一日中行われ、ヘルシンキで一泊することを余儀なくされました。飛行機は翌日の便に振り替え、ホテルも航空会社側でとってくれることになりましたが、飛行機もホテルもバラバラに指定されたり、ホテルに行ったら航空会社から連絡が入っていないと泊まらなかったりと、アクシデントの連続でした。

しかし、この一連のアクシデントによって、参加者の方々と距離もぐっと近づいたのではないかと思います。みんなで空港内を走ったり、長いクレームの列に並んで話したり、同じベッドで寝たり、相談し合ったり。事前の研修で顔を合わせてはいても、もともと知人ではない人たちとの旅行ということで不安もありましたが、このアクシデントが良い機会となり、一週間の旅を皆さんと楽しく過ごせたと思います。また、「遊」は人権や社会問題に関わりの深い団体で、実際に労働問題を取り上げた講座なども行っています。しかし、ストライキについて知識として知っていても、実際にストライキが起

きることがほとんど無い日本では、それを現実のものとして落とし込むことは難しいと思います。そのため、実際に身をもって体験して、大きな影響力のある運動だと感じられたことは、私にとって大きな学びとなったと感じます。そう考えると、今回「遊」のツアーでストライキに遭遇したことは意味のあることなのではないかとも思いました。

2. 食事

今回の旅での食事についてです。フライト時間が長かったので、行きと帰りの名古屋ヘルシンキ間では機内食が出ました。機内食はメインが選べて、行きは肉か魚、帰りはカレーかパスタから選ぶことができました。そのほかにパンと蕎麦がついてきたので、主食ばかりだなあとびっくりしました。もしかしたら全部食べる必要はなかったのかもしれませんが…。

朝食付きのプランでホテルに宿泊していたので、朝食は毎回ホテルのビュッフェでした。置いてあるものは、大体パン、チーズ、ハム、卵、野菜、ヨーグルト、シリアルなどでした。特徴的だったのは果物です。カットされたものとは別に、バナナやプラム、リンゴ、梨などが丸ごとおいてありました。日本は果物が高いですし、丸ごとの果物を置いているビュッフェも少ないので、宿泊者の方がリンゴをまるかじりしているのが面白い光景に感じました。

昼食や夕食は予約していたレストランで食べることもあれば、各自で自由に済ませることもありました。その中で印象に残っているのはジュレックというスープです。ライ麦を発酵させたものをサワークリームや牛乳などで伸ばしたも

ので、中にはソーセージやゆで卵などが入っていました。酸味があるけどまろやかな味わいで、私はすごく好きでした。主食はジャガイモで、朝食以外のすべての食事で出てきましたが、マッシュされたもの、5mmくらいの輪切りで揚げてあるもの、バターでソテーしたものなど、調理法や味付けに変化があり、飽きることなく食べ続けることができました。ジャガイモは肉や魚に添えられていて、それにプラスしてサラダ、という感じの食事が多かったです。魚は少ないと言われていましたが、思ったより食べる機会がありました。中でも多かったのがマスで、丸まる一匹をグリルしてバジルとレモンとガーリックバターで味付けしたものがとても美味しかったです。量が多くて食べきれないことが多々あったのが少し残念でしたが、食文化の違いを学びながら美味しいものをたくさん食べられてよかったです。



3. 街の様子

日本との違いという点で特徴的だったのは街並みです。ポーランド滞在中、クラクフやワルシャワの市街、旧市街、旧ユダヤ人街など、いろいろな街並みを見させてもらいました。電線が非常に少なかったのが印象的で、トラムは電気で動いているようで停車駅付近に電線のようなものがありました。基本的には電柱や電線は見かけることはありませんでした。また、旧市街を歩くことが多かったからなのか、建物がレンガ作りだったり、デザインも歴史を感じるつくりのものばかりでした。他の国に行ったことがないので、適切でないかもしれませんが、本当に想像した通りの「ヨーロッパの街」とい

う感じで感動しました。

治安という点では、スリが多いということで、事前の研修会でも何度も注意喚起があり、リュックに鍵、ポーチを前にかけるなど徹底していましたが、行ってみるとそこまで警戒する必要はなさそうでした。今回は基本的にトラムやバス以外では人混みに長時間いるということもなく、人が周囲にいる状況が少なかったからかな、とも思いますが、コーディネーターの岡田さんも旅の途中で「以前に比べて治安が良くなっているような気がする」といったことを言っていました。私は初海外ということでかなり警戒して行動していましたが、バスで移動していた時に、リュックが開けっ放しだと現地の方が教えてくれたことで、海外だからといって過剰に警戒するのは失礼かもしれないとも思いました。もちろん被害にあわないために自己防衛する必要はありますが、海外=危ないと考えすぎている、どこも普通に人が生きている普通の街なのだということを少し忘れていたような気がします。

4. 参加した感想

今回、このツアーへの参加はとても悩みました。大学で政治学を専攻しており、ホロコーストやナチスドイツについては授業でもよく取り上げられるため、きちんと知りたいという気持ちはありました。しかし、学生という身分で金銭的にも余裕がなく、後期授業も休まなければならない。また、親しい人が少ない中での参加が不安だったというのもあり、あまり前向きに考えられてはいませんでした。しかし、「遊」の「ひと」基金からの補助を受けられたことと、周囲の人たちの強い勧めで参加を決意しました。単刀直入にツアーの感想を言うと、参加してみても本当に良かったと思います。学びはもちろんのこと、参加者の方々と過ごした時間、現地の方々との交流、新しい街・食・価値観との出会いなど、どれをとっても素敵な経験でした。本当にたく

さんのことを学び、大きく成長できた一週間だったと思います。

その中でも強く私の記憶にあるのは、やはりアウシュビッツでの中谷さんのお話です。ホロコーストをただの歴史としてではなく、現在の世界の構造や社会問題、人間の感情と結び付けて話していて、色々考えることができました。

自分語りになりますが、私は少し変わった人生を歩んできたため、普段から自分が少数派だと感じて苦しい時がありました。また、不満や問題意識をもっていても周囲には理解されることが多く、最近ではそれらを主張することにも疲れていました。その中で参加したツアーだったので、「多数派という訳ではなかったナチスドイツがユダヤ人の迫害を進めていく背景には、少数派になることを恐れて傍観者となったり、

■ ツアーに参加して

体調不良を抱えての旅でした。持病について説明しておきます。アトピー性皮膚炎を患うようになった原因の一端は、出生時や幼少期の病院での抗生剤の大量使用、腸内細菌叢の破壊だとにらんでいます。標準治療となっているステロイド薬剤も医学界の常識とは裏腹に、長期的にはかえって症状を悪化させることを経験しました。ここから、医学や科学の常識を疑い、環境や原発の問題に関心を持つようになりました。20代末に瀕死の状態になってから代替治療を模索してきました。以来、半年から数年単位の悪化や患部の移動を伴いながらも着実に治ってきました。ただし治る過程で皮膚が壊れます。今回は、まぶた周辺や結膜がボロボロ、首や手に無数のアカギレという状態でした。乾燥をさけるためのクリームは欠かせませんが、名古屋空港で容器の容量制限に引っかかりました。これ

無関心でい続けた多数の国民がいる。そう考えた時、ホロコーストを起こしたのは一体誰だったのか？」という中谷さんの問いかけにハッとしました。言い方は悪いかもしれませんが、少数派でいることや主張すること、議論することを恐れずにいて良いのだと、背中を押されたような気がしたのです。

また、ユダヤ人の迫害は元々街角のヘイトスピーチから始まったといえます。現在の日本でも在日コリアンへのヘイトスピーチや生活保護パッシングが行われています。これを是としている国民は多くはないと思います。しかし、それに関心をもったり異議を唱えたりする国民がどれだけいるのか。そう考えるとホロコーストの種は日本にもあるのだと思います。それに対して無関心にならず、どう行動していけるのか考え続けていかなければならないと思いました。

本田 宏

まで外国の空港でも中身を見て通してもらっていたので油断しており、ご迷惑をおかけしました。飛行機内は空調による乾燥がつらく、現地到着後も目がつぶれていたため写真映りを避けており、「ノリが悪いね」と言われるはめになりました。

多少元気になってきたのはクラクフの旧ユダヤ人街訪問からで、昼食の料理やお酒（オーストリアの有機ワイン）はとてもおいしかった。ただ、私がドイツの大学でお世話になったワルシャワ出身の先生は、両親がソ連に逃れてホロコーストを免れたユダヤ人ですが、共産主義政権が国民の不満をそらすために反ユダヤ主義をあおった1960年代末にポーランドを出国しスウェーデン国籍をとった人です。商業化された旧ユダヤ人街は嫌いだと言います。もっとも、ドイツの大学に赴任した当初は強制収容所に移

送される悪夢を見たとも言っていました。今回ワルシャワはほとんど見られませんでした。映画「戦場のピアニスト」に出てくるゲットーユダヤ人やポーランド人による絶望的な武装蜂起（1944年）を記念した施設は、いつか訪ねてみたいです。

職場の労働組合委員長としてはストができる国への興味もわいてきました。サケやニシンが

■ ポーランド雑記 ～はみだしコラム～

1. ふと見れば化石

今回のツアーで利用したホテルの床や壁に、大理石がふんだんに使われていたことに気づきました。札幌でも某老舗百貨店や地下街などで大理石が使われている場所があるようですが、これほど頻繁にはお目にかかりません。

インターネットで見ると、建材として利用される大理石は南ヨーロッパやトルコ産のシェアが多い一方、化石を多く含み美しいとされるドイツ産の高級大理石（学問上は石灰岩）は日本でも人気だとか。ドイツに近いポーランドで化石入り大理石を多く目にするのは自然なことのようなのです。

予定外に宿泊した最初のヘルシンキのホテルの内装は、初日から旅程が狂ってしまった強い衝撃と疲れでよく覚えていませんが、クラクフやワルシャワのホテルではあちらこちらで大理石が目を引きました。写真はツアー最終日のメルキュールホテルのロビーで見つけた巻貝の化石です。



ホテルの朝食に出てきたフィンランドの方が食事はおいしそうです。そうこうしているうちにフィンランドで34歳の世界現役最年少の女性首相（社会民主党）誕生のニュース。連立政権に参加する5党全ての党首が女性、うち4人が30代だそうです。第二次世界大戦中にソ連の侵攻に反撃してドイツ側についた歴史も少し知りたいと思いました。

M. A.

2. オシャレカラス

ところ変わればカラスも変わる。どう見ても動きはカラスなのに、色が違う。ちょっと小ぶりでカワイイ。黒くないカラスを初めて見ました。

予定外に観光できたヘルシンキの街中で、グレーと黒のツートンカラーのおしゃれなカラスを発見。フィンランドはカラスもマリメッコのようにオシャレだな～と思っていたら、アウシュビッツの駐車場でもツートンカラーを見つけました。こちらはグレー部分が首周りだけ。

札幌のカラスより一回り小さく、くちばしも華奢です。日本のカラスも真っ黒でなければもう少し愛されていたかも知れませんね。



■ 雑感

トイレの話 (その1)

ヘルシンキの「ホリデイインホテル」で

洗面所の蛇口からホースが繋がっていて、便器に座って、手を伸ばせば届く位置に設置されていた。用をたした後の洗浄用と思われる。日本のシャワートイレの原型(?)。これと同じようなものを、2011年ボルネオ島キナバル山に登った時の山小屋で出会った。こちらは水が出っぱなしであったが、この方式は慣れぬと、(何しろ見えないところを的にして、放水しようというのだから)、自分の尻は言うまでもなく、あたり一面ビショビショになる。私も一度挑戦したが、結果は、無残であった。しかし、慣れてくると、ホースを器用に捜査して、見事に的に当たることだろう。足の長さお尻の大きさ、形に関わらず、自己責任で対応できる。日本式は、多少調節ができるが、機械に合わせて尻を前後左右に動かさねばならぬ。もっともそれがよいのだという人もいられるかもしれない。尻を道具に合わせるか、道具に尻を合わせるか。文化の違いと考えるのは考えすぎか……

■ よく歩いた旅でした

帰国2日後、久しぶりに温泉のゆったりとした湯舟に浸る。足を伸ばしいつもの体操をしてみると、なんだか足指の動きがとてもいい感じ。みると、なんといつも申し訳程度にくっついて小指も含め全ての指たちが大きく開いてその存在感を誇示している。そうだ!! 毎日15,000歩以上、多い時には2万歩以上も歩いた! と、思い出す。普段3,000歩位しか歩かない私にとって、石畳の大地を毎日よく踏みしめて歩いてくれたなあと感謝。この時期にこのタイミングでこの研修旅行に参加できたこと、そ

返町 賢治

トイレの話 (その2)

男子用のチューリップの高さが高い。身長が160cmに満たない私には大変だった。その上高齢のため尿意を催してから制限時間が短い。ますます大変だった。「高は低を兼ねない」。中部空港におりてトイレに入って、ゆっくりしました。

トイレの話 (その3)

有料トイレは久しぶりだった。以前、中国にはあった。アウシュヴィッツの博物館地下のトイレで、英語(?)で「さっき一度支払ったから、こんどはしはらわなくていいか?」と大きな声で係の人と交渉していた男性。係の人は、「その都度支払ってください」と反論していた。しばらくしてこの男性は、戻ってきたが、この人は用をたしてきたのか? お金の持ち合わせがない時は、どうしたらよいか? 高齢の私は、なご一層心配になってきた。



江川 靖子

して12人の個性溢れるメンバーとの出会いにも感謝。途中財布置き忘れで迷惑をかけたこと、申し訳ない。夫から言われた「ポーと生きるんじゃないよ!!」を肝に銘じます。

2019年11月25日(月) ~ 12月1日(日)

ツアー旅程

■ 1日目(11/25) 新千歳空港出発、フィンランドヘルシンキ泊

早朝新千歳空港に集合したら、フィンランド航空がストライキ。結局ヘルシンキで予定外の1泊。ホテルの部屋が足りず、シングルユースだった男性2人に1室にしてもらうことにしてなんとか解決。

■ 2日目(11/26) ヘルシンキ発→ワルシャワ→クラクフ、クラクフ泊

ワルシャワ便は全員同じ便が取れず、岡田さんともう2人が先発。あとの8人は、3時間ほどヘルシンキ観光。それにしてもフィンランドは物価が高い。500mlの水が3.1ユーロ(370円)、ホットドッグが8ユーロ(960円)。無事にワルシャワ空港で合流したあと、鉄道でクラクフへ。2時間半の乗車中に飲み物のワゴンを押したおじさんが来たが、まだ両替をしていなかったの、「We have no Polish money」と言ったら、なんと「Free」。

■ 3日目(11/27)

クラクフ 旧市街散策、バベル城見学、ヤギエオ大学日本語学科見学/交流会

現地在住の日本人松崎さんの案内で、両替と旧市街散策。レートは1ズロチ=30円ほど。街角で売っていたベーグルに似たパンが1個2ズロチ、水も2ズロチちょっと。ヤギエオ大学の学生たちとの交流の後、夕食は19世紀創業のレストラン「ヤマ・ミハリカ」でフォルクローレのディナーショー。客も一緒に踊る場面もあり、お仲間のおじさんたちもがんばって踊った、うふふ。ホテルからバベル城、ヤギエオ大学、レストラン、またホテルまでずっと徒歩。20000歩近く歩いた。

■ 4日目(11/28)

アウシュヴィッツ博物館見学、午後自由行動、クラクフ中央広場散策

早朝7時40分にタクシーでホテルを出発。9時からアウシュヴィッツ、ビルケナウ見学。クラクフ市内に戻って各自夕方まで自由行動。細谷たち4人は前日見られなかったコレギウム・マイウス(ゴシック様式の大学初期15世紀の建物)を見学。美術館とカフェテリアとミュージアムショップがあり、コペルニクス柄(?)の靴下を買ったりした。

■ 5日目(11/29)

オスカーシンドラ博物館、ユダヤ人街、日本美術技術センター MANGGHA 訪問

バスで、シンドラ博物館へ。ユダヤ人街のシナゴークと墓地を見学したあと、岡田さんの日本語の生徒だった青年が働いているレストランで昼食。ポークリヴのビール煮とオーガニックのワインが絶品だった。MANGGHA 見学中に雨が降り始め、タクシーもいっぱい、バスも満員でまたしても徒歩。その後、自由行動。クリスマス市が開かれている中央広場に着く頃には雨も止んで、トラディショナル・スーパの屋台でジュレックを食べ、クラクフ最後の夜を楽しんだ。でも、お店の閉店時間が早い。18時とか19時でほとんどの商店が閉店。あとでゆっくり…と思っていた買い物がありできなかった。

■ 6日目(11/30)

ヴィエリチカ岩塩坑見学、クラクフ発、ワルシャワ泊

朝食後、チェックアウトを済ませ荷物をホテルに預けて、バスで40分ほどのヴィエリチカ岩塩坑へ。12時過ぎにクラクフ駅近くに帰り、ショッピングモールのフードコートで各自昼食。ベトナム人の

青年の店で久しぶりに米飯や焼きそばを食べた。ワルシャワへの列車は日中だったので、ずっと平野が続く田園風景が見られた。2日目の予定だったワルシャワ散策ができなかったので、夕食後少しだけ旧市街を歩いた。しかし、体の芯まで冷える寒さだった。

■ 7日目 (12/1) ワルシャワ → ヘルシンキ → 名古屋

午前中少しだけ時間があって街へ出てみたが、ブラックフライデーの翌土日はほとんど全ての店が休むとかで、カフェも開いていなかった。ポーランドに残る3人にお別れをして、ワルシャワ空港へ。ヘルシンキでは、出国手続きが機械化されていてちょっと戸惑ったが、まずまず順調に乗り継いだ。

■ 8日目 (12/2) 名古屋→新千歳空港着、解散

ほぼ定刻に名古屋到着。入国手続き、税関を通過して、新千歳へ。時差ボケがづらい。

【ツアー参加者】

- | | |
|------------|---------------------------------------|
| 江川 靖子 | 主婦、生活クラブ |
| 権瓶美紀子 | 函館在住、主婦 |
| 沢田 祐季 | 北海学園大学法学部4年生 |
| 返町 賢治 | 1943年、中華民国浙江省嘉興県生まれ。メディアアンビシャス会員。 |
| 原 幸男 | いつの間にか高齢者の仲間入りをして面食らっている毎日を送っています。 |
| 細谷 洋子 | ずうっと「遊」理事。図書館運動、脱原発運動など。 |
| 本田 宏 | 北海学園大学法学部政治学科教員。「遊」理事。 |
| 森脇 栄一 | 「遊」会員。一人では無理なポーランド旅行で貴重な体験をさせて戴きました。 |
| 渡部 一雄 | 今年7月に会社を中途退職し、現在は無職で残りの人生を気ままに送っています。 |
| M・A | ツアーコーディネーターの高校時代の同級生つながりで参加。某団体の職員。 |
| 細谷 悠生 (SL) | 台湾在住、フリーペーパー編集。国外にいるけど、「遊」会員。 |
| 岡田 朋子 (L) | (財)北海道国際交流センター札幌エリアマネージャー |

【編集後記】

久しぶりのさっぽろ自由学校「遊」飛ぶ教室「ポーランドーアウシュヴィッツから平和を考える」の報告をお届けします。

今回のツアーの目的は、もちろんアウシュヴィッツを訪れることがメインでしたが、あまりよく知らなかったポーランドという国と出会い、その魅力を発見し多くのことを考えさせられる旅になりました。

大国に挟まれて3度国を失い、そのたびに再建し復興してきたことは岡田さんも書かれています。クラクフの美しい街並みは第二次世界大戦で8割を焼失しながら、写真や資料に基づいてほぼ戦前と同じに再建されたものだとい

ことでした。ポーランドの人たちの国、郷土への愛のようなものを、再建された建物や博物館の展示、きれいな街路など随所に感じました。

「ゆうひろば」の別刷として発行することになっており、参加者の皆さんには帰国早々から原稿書きをお願いしました。アウシュヴィッツ、ポーランドの街や文化、そして自分自身とも出会う旅であったことを実感する原稿が寄せられました。アウシュヴィッツ公認ガイドの中谷さんの言葉「彼らは教室に持ち帰って議論する」を日本の若い人たちにも体験してほしいと強く思います。(細谷 洋子)